NO.7

57.11.17

読売(2)

今日の顔

深刻な食糧難にあえぐ、ソマリアの人たちに秋田米を送ろう――と、この一年、秋田県内で"愛の一粒運動"が展開された。四万人以上の小、中学生らから集まったササニシキ百四十俵（八・四㌧）は二十日ごろ、横浜からソマリアへ向けて送り出される。「この運動が、毎日食べている米をもう一度見つめ直すきっかけになれば……」というのがリーダーの弁。

「愛の秋田米一粒運動」に取り組む

佐々木（ささき）正光（まさみつ）さん

東アフリカのききんを報じた新聞記事を読んだのが、昨年暮れ、運動を始めたきっかけ。だが、学生時代、東南アジアや北アフリカを一人旅しながら、発展途上国の人々の悩みを直接目で見、肌で感じ、在学中からボランティア活動に取り組んできた。

四年前、家業（衛生設備関係の仕事）の都合で都庁をやめ、郷里に帰ったが、「困っている人のために何かをしなければ」の思いは断ち難く、新聞記事が"愛の一粒運動"への導火線となった。

秋田県立西仙北高校から読売理工学院、中央大（法）を経て、東京都庁に勤務。五十三年春、郷里へUターン。ボランティアグループのリーダーとして活躍中。三十二歳。

アフリカの旅先で出会ったやせ細った子供たちの顔に、満ち足りた秋田っ子たちの顔が重なる。その秋田の子供から、東アフリカの子供たちへ一握りの米を……。そんな願いを込めての運動だっただけに、「ある学校から『子供たちが米についての考えを新たにしたようだ』との便りをもらった時はうれしかった」。

運動にあたって結成した「日本ユニセフ協会秋田友の会」の会長として、「これからも、秋田で出来る独特な運動を進めていきたい」という。それはやはり「米」が中心になるだろう。「今回の運動が成功したのは、その内容が身近にある米だったせい」と考えているからだ。

順調に行けば十二月上旬には、"愛の秋田米"がソマリアに着く。その米には、秋田の人たちからの[illegible]う、何よりの[illegible]が詰まっている。

（高橋　五郎記者）

57.11/25 秋田 アサヒ

ひと

食糧危機のソマリアに米を送る日本ユニセフ協会秋田友の会の会長

佐々木　正光さん（三二）

一粒の大切さ訴え

深刻な食糧危機に悩むアフリカ・ソマリアの人たちに秋田米を送る。先月一日から一週間、県内で展開された「愛の一粒運動」は、期間中、四万人以上の小、中学生らが参加、百四十俵（八・四㌧）のササニシキが集まった。

「昨年二月ごろ、朝日新聞に載ったソマリア難民キャンプの窮状を伝える記事と写真を見て、これはいかん、と思った。募金活動に取り組んだが、うまくいかなかった。十四人の仲間の会員と考えあぐねた結果、私たちの生活に最も密着したお米を選んだんですよ」。「物があふれ、豊かな社会に慣れっこになっている日本の子供たちに、一粒の米の大切さを考えてもらいたかった」とも。

食糧の確保や輸送手段など、いざとなると難問が山積していた。「農水省や外務省などには、昨年から十回ぐらい通いましたよ。みんな『アイデアはいい』と言ってくれるんですが……」。結局、日本郵船の好意で来月初めに横浜から船積みされ、約二週間後にはソマリアの首都モガジシオへ。その後、国連のWFP（世界食糧計画）が難民キャンプまで運ぶ。予定では十一月下旬ごろには、飢えに苦しむ人たちのもとへ秋田米が届く。

学生時代からさまざまなボランティア活動に参加。「世界は一つ」を目指す世界連邦建設同盟の会員となり、難民救済や平和運動に携わり、青年学生部委員長を務めた五十三年には、平和アピールのためにキャラバンを組織して米大陸を横断したことも。

「これまでの活動は、自己満足のところがあった。今回の一粒運動で、初めて地についた活動ができた[illegible]する。これも、[illegible]のお米を入れて来てくれた多くの子供たちのおかげだと思い感謝しています」

昨年十一月に生まれた一人娘に「愛」と名づけた。「愛の一粒運動の愛からとったんですよ」。笑顔がさわやかだ。

西仙北◇昭和町生まれ。中央大法学部卒。都庁職員を経て、現在は郷里で石炭ストーブなどの販売会社を経営。

57.11/24 東京アサヒ夕刊

ソマリアに愛の秋田米

深刻な食糧危機に悩むソマリアの人たちに秋田米を送ろうと、秋田県内で「愛の一粒運動」が展開され、四万人以上の小、中学生らが参加、百四十俵（八・四㌧）のササニシキが集まった。この運動のリーダーが日本ユニセフ協会秋田友の会会長の佐々木正光さん（三二）＝写真。

来月初めに横浜から船積みされ、約二週間後には首都モガジシオへ。十一月下旬ごろには、飢えに苦しむ人たちのもとへ届く。

佐々木さんは学生時代からさまざまなボランティア活動に参加。「世界は一つ」を目指す世界連邦建設同盟の会員となり、難民救済や平和運動に携わったこともある。

「これまでの活動は、自己満足のところがあった。今回、初めて地に着いた活動ができた。これも、封筒に一握りのお米を入れてくれた、多くの子供たちのおかげ」